



Plague Days

釧路 兎玉 昌彦

自由という文明のツケか疫病の世界征服ここに極まる
感染で症状出ぬ人、感染後アツという間に他界する人
肺炎の重症化リスク抱えつつ待機を迫る崩壊医療
国も人も門戸を閉ざし引きこもりじつと我慢の季節となれり
持病持ち薄水を踏む冬日をな愛すべく学にいそしむ

卒業式 2020

北広島 古屋雅三知

コロナ禍に在校生も父兄らも見送りできぬ寂しさあれど
雪解けの通いなれたるこの路も今朝を最後と踏みしめて行く
底冷えす体育館に響き渡る卒業証書を読み上げる声
高らかな卒業生の歌声は 思い思いの希望を胸に
在校生無き静かなる学び舎に三年間の別れを告げて

衣脱ぐ

函館 水関 清

ひと冬の雪解ける音地に満ちて 春への変奏 聴く心地する
握る手は熱く内から燃え出して 新人研修 終へし若人
満ちて来る 曲のしらべに身をのせて 彼方へと飛ばたく指揮者の背中
停まるたび 桜の迎へし江差線 錆び行くレールと崩れしホーム
春の野を 歩きて摘みて此処に来よ 香り豊かな草もちにせむ

冬のコロナ

士別 竹内 幹夫

名に背き光纏はぬコロナたちよ 氷雪の地に凍て果てよ、いさ
凶^{まが}霊疾く消え去りねと祈れども 吹雪に紛る柏手の音
外^とつ国の荒ぶる^{すだま}霊潜み入りて 病人等の命窺ふ
咳押さへ息も潜めし人々の 慄きの声マスクより洩る
遅き湯に浸かりて面を真白なる タオルで覆ひぬああ疲れたり

一人暮らし

江別 三宅 浩次

報道は一人暮らしが増えたというその現実を受け入れ難く
生き方は人さまさまにあるといえ一人暮らしは寂しきものを
春の日に啓蟄という節気あり土中の虫も外に顔出す
ご近所の一人暮らしの家の窓今夜も安心明かりが灯る
孤独死も悪くはないと強がったお年寄りが息子の元へ

大豆

札幌 浜島 泉

蒸しあげし大豆の湯気が立ち昇る 食品となる香り凄じ
娘から椅子新調のお年玉 古りし彼女のものは廃棄に
庭の雪に^り獣足跡キタキツネか 犬は深雪を歩かぬと言ふ
寿司とチョコ桜葉の餅 コンビニの予約広告購買そそる
丘陵に雪を残して秋野菜を冷蔵し 味整へてをり